

日独合作映画『新しき土』をめぐって（その3）

海老坂 高

都市の景観

大都市ベルリンの有様は、留学体験者によって大正時代からつぶさに日本に紹介されていた。二年間ドイツへ留学していた片山孤村の『都會文明乃畫圖伯林』（大正二年、一九一三年）は市街の略図二枚、写真三十八葉を収載した、本格的なベルリン案内である。その「序」にいう。

伯林は實に著者に取つては歐洲に於ける第二の故郷で、伯林に於けるほど氣持よく、安心して住んだ土地は無かつた。もとより貧乏な著者は伯林が所藏し、提供する精神的財寶には遍く眼を曝すことが出来たが、大都會の歡樂に耽溺し、近代の物質的文明が與へる一切の利便に浴するが如き洒落れたことは出来なかつた。従つて獨身生活の無聊を感ずること深く、異邦人のみじめな生活に倦んで、伯林——單調なる伯林を呪つたこともあつたが、二年の留學期滿ちて愈ゝ日本へ歸つて見ると、憂しと見し世ぞ今は戀しく、伯林に於ける生活が眞の生活、充實したる生活のやうに思はれて、事毎に貧弱な日本の文明と貧弱な我れ自らの生活が厭はしく、伯林を慕ふの情凝つて終にこの書となつた。¹⁾

まだ東京には存在しない、文明の精華たる大都會絵巻を前にして、片山は国富の違いを痛感する。ベルリンへの憧憬はひとえに貧しさの自己認識から発している。ベルリンと東京の間には比較を絶した懸隔がある。ベルリンの生活が東京で得られるなどとは思つてもみないことだったろう。片山にとってベルリンは、仰ぎ見る別天地なのである。

映画の中で、日本に到着したゲルダと輝雄はタクシーで夜の東京を見物する。実景は大阪のそれだが、不夜城のはなやかなネオンサインがじつくりと画面に映し出される。予想外の景色に驚かされたゲルダは輝雄に言う。「ねえ、私たちは日本にいるのかしら、それともベルリンにいるのかしら。」

ドイツ人観客に、日本にもベルリンに比する華やかな大都会が存在するということを知らしめる映像である。片山の『都會文明乃畫圖伯林』から二十数年。日本の国力は着実に伸張していた。それにしてもファンクはなぜ街の眺望が利かない夜を選んだのだろうか。

おそらく昼の町並みが決して映像に耐える立派なものではなかったことが大きな理由であろう。正宗白鳥がパリの公園で出会ったチェコ人の老夫婦はプラハの「都會美」を自慢しているが²⁾、東京の景観を外国人に誇ることができる日本人は残念ながらまづいなかった。横光利一は長編小説『旅愁』のなかで、久しぶりに眼にする祖国の姿を前にした西欧帰朝者の心を揺さぶる強い悲哀の念を書き留めている。

西洋から歸る多くのものが、船中から神戸を見て、思はず悲しさに泣き出すといふもの狂はしい醜態も、天平平安のむかし遣唐使の去來した船中でも、幾度久慈のやうな青年に演じられたことだらう。それらのものも、言葉が通ぜず通譯を伴つて行き、同僚たちから受けた屈辱に耐へ得たものたちが、歸つて多くの仕事をし上げたのに引きかへて、言葉に練達したもの多くは、絶望のあまり終生を故郷の草の中に埋め、溜息と化して死んでいつた事實の多かつたのも、むかしと變らぬ今日に似た旅愁の所業の一つかとも思はれた。³⁾

西欧の重厚で均整のとれた街並みに慣らされた眼からすれば、神戸の町はあまりにも粗末で雑然としており、帰朝者はあらためて彼我の文明的落差に愕然とするのである。留学の志を抱いて洋行し、刻苦精勵して外国語を学び西洋の精神に親しく交わった人間ほど、旅愁の憂いは深い。

横光はそれを、遣唐使このかた繰り返し抱懷されてきた日本独特の伝統的感情として重く受けとめるのであるが、ドイツで八年間学びドイツ語を流暢に話す輝雄に、西洋に魅入られて洋行した久慈を悩ませる憂いの影はない。西洋対東洋の図式の単純化はここにも現れているのである。

独日友好の国策映画の制作責任者として、ファンクは日本の貧しく雑然とした街路の撮影に神経を使わざるをえなかったはずである。ベルリンの広壮で整然とした街の構えに比肩する場所は、東京のどこを探しても見当たらない。

昭和十二年に渡欧した山田耕筈は近代の先端をゆくベルリンの姿に、あらためて感慨を催している。

伯林に足を踏み入れた者の一様に感じることは、「東京など、まだ問題ではない」といふ事だ。しばらく歐洲の生活から遠ざかつて、井の蛙となり切つてしまった私など、別に歐米侮蔑といふやうな偏狭な考へはもたぬ迄も、いつの間にか東京盲讃者と化し、「ミュンヘン・ビール」よりは「キリン!」といふ風に、何もかも日本一番と思ひ込んでゐたのだが。

砥のやうな磨きあげられた廣大な路面。整然たる宏壮建築。アカツイア、リンデ、カスタンエなどの、眼に染み入るやうな街路樹の新緑。日本の五倍もあらう巨大なバス、それと同大のモンスター・トラック、それも時には三輦も連結して堂々と市中を疾走してゐる。もうその光景だけで東洋人の膽を奪ふには十分だ。その上地下鐵高架鐵、路面電車はいふも愚、三十萬臺を割る夥しい自動車群。空には殆ど寸時も姿を消さぬ航空機。全く息づく暇もない激しい立體交通網だ。⁴⁾

片山孤村が明確に意識せざるを得なかった日本の後進性は、もう昭和十年代には過去のものとなっている。山田が感心するのは、西洋と肩を並べる文明国となった日本から見ても、さらに一歩先を行くドイツの姿

なのである。この賛嘆は横光の「旅愁」とあざなえる縄のごとき関係にあるといってよいだろう。

小説『旅愁』のテーマは、模倣という自己認識を伴う行為が最後に行き着く自体としての西欧精神によって、日本人が直接触れることのかなわぬ西洋精神によって、反射される日本精神の姿を描き出すことにあった。それは山田のように西洋の規範に従って日本を眺めるのではなく、西洋から独立した日本の個性を掴むことを意味していた。横光はもはや文明の後進性に根ざす劣等意識に煩わされてはいない。先人たちが手探りの中で獲得した模倣の生産性に敬意を払い、西欧精神から普遍性の仮面を剥ぎ取ろうとするのである。この見方を進めるならば、西欧に倣った近代化の所産を西欧の物差しによるのではなく、各文化の独自性のもとに評価することになろう。都市景観も例外ではない。

つまり、彼我の都市景観の違いは、近代化の進み具合を判断できるバロメーターのごとく見えるが、その本質にあるのは、それぞれの文化の刻印を帯びた個性なのである。日本の街並みの特徴は貧しさや文明の遅れからのみ説明出来るものではない。そこには、のちにオギュスタン・ベルクが精緻に分析してみせたように、日本独特の形成原理が見られるのである。⁵⁾

それにしても日本人が歴史的に身につけてきた寸法感覚は、広大や広壮の対極にあるものではなかろうか。帝都の顔といってもよい丸ビルや東京駅にしても、ヨーロッパの感覚からすれば、とても首都の玄関口に値するスケールではない。造りが欧風であるだけに、日本を知らないドイツ人観客にも、比較による優劣はつけやすい。ドイツが防共協定を結ぶ日本は大国にふさわしい街の構えを備えていなければならないだろう。

この頃、日比谷・有楽町界限には日比谷映画劇場（昭和八年）、東京宝塚劇場（昭和九年）、有楽座（昭和十年）などの大型施設が相次いで建設され、街の装いが一新されていた。建物自体はむしろベルリンの繁華街よりも新しかったかもしれない。しかし個別の建物にいくら意匠を凝らしてみても、町並み全体の景観が配慮されなければ、欧米の都市と比べ

るわけにはいかない。昭和十四年に同盟通信ベルリン支局長として渡独した江尻進は、日独の街づくりの違いにすぐ気がついた。

到着早々のベルリンの街頭での印象は、社会も個人の生活も、組織的、計画的に動いているというのが、日本と比較しての第一印象だった。ポツダム広場では、大規模な地下鉄工事が進められていたが、その現場の上の街路は、規模の揃った鉄板で一面真っ平らに覆われ、平坦な道になっている。当時の日本では、材木をゴロゴロと並べたデコボコ道で、徐行の自動車の通るたびに、ガタピシと揺らぐのが、ひどく気になっていた。また建物の外壁に組み立てられた工事用の足場は、日本では大きさのマチマチな丸太を、荒縄で縛って組み上げた無格好なものだった。ところが、ドイツでは、同じ長さの中空のアルミ管を組み合わせ、ネジで締めた整然たる形のものが、聳え立っている。いかにも気持ちがいい。⁶⁾

ベルリンでは建築現場においてさえ、整然たる美しさが支配している。もちろん街並みに関しても厳しい秩序を求めるのがドイツ流である。昭和十一年（一九三六年）にベルリンに留学した邦正美は次のように記している。

ベルリンの街並みはダーレムやツェーレンドルフなどの郊外にある高級住宅地をのぞいて、同じような高さの四階建て（日本式に言えば五階建てになる）で、似たようなファサードの建物がぎっしり並んでいる。ヨーロッパの他の古い都市の変化に富んだ建物を見なれた目にはちょっと味気ないようでもあるが、しかし設備は立派で、住むには実用的な建物である。即物主義に徹しているいかにもドイツ人らしい街並みである。⁷⁾

建物の高低差が少なく、「見た所、たゞ整然としてゐるばかりで趣味に

乏しい」印象は、正宗白鳥も感じている。⁸⁾それにひきかえ東京はどうか。たしかに日比谷・有楽町の新興劇場街はどの建物も真新しい。個々のデザインも決して悪くはない。変化にも富んでいるかもしれない。しかしベルリンからやってきた映画監督の審美眼を納得させるには空間としての美しさがまったく欠けている。約言すれば、東京には美的に都市を構成しようという価値観も計画もなかったのである。

ファンクと入れ替わるようにして日本を去った建築家ブルーノ・タウトは、もし日本の役人がイギリスやドイツのように高名な建築家や芸術家を枢要な地位につけることを許したなら、都市計画はこれほど惨めなものにはならなかったろう、と書き残している。⁹⁾東京はこのつけを今でも払わされている。官僚制はこれまで数限りなく批判され、また批判され続けているが、官僚や建築家・芸術家の社会的ステイタスに根本的な変化が見られない以上、都市空間の質的変貌は望むべくもないだろう。さらに日本人の幾何学的配置や人工臭を厭う趣味も災いしている。都市空間を自然の賦与とは見ずに、自然とは切り離れたところで意識的・人工的に創造してゆく姿勢は日本の伝統には見られないのである。

もっとも夜景ばかりでお茶を濁すわけにもいかず、ファンクは昼間に撮影した東京會館や日劇など、個々の見るべき建物の部分的アップを挿入して、これを補っている。苦肉の策ではあるが、この判断は正しかった。現実の東京を知らない西洋の観客にも、日本の近代性を十分に伝えることができるからである。ベルリンは世界一の劇場数を誇る演劇都市だった。収容人員3千人の日本劇場（昭和八年）の威容は、ドイツ人観客に好ましい印象を与えたことだろう。

だが、ファンクが夜の街を画面に取り入れたのは、もっと積極的な理由あつてのことにちがいない。苦肉の策にしてはシーンが長すぎるのである。

ネオンサイン

東京出身でベルリン暮らしが長い音楽家田中路子は、東京のネオンサ

インの魅力について次のように述べている。ベルリンは「私の祖国の東京のような、こけおどしの華やかな不夜城とはおよそ縁遠いネオンサインは貧弱そのもので、——ベルリンは東京に百歩も千歩も譲ります。」¹⁰⁾ そのベルリンからやってきたブルーノ・タウトも、日本の「夜間照明」の織り成す光の乱舞を嘆賞している。大阪の心斎橋には「河畔の橋の上からも望まれ、また水に映ったのも眺められる夢のような広告照明があって、光と色に酔った眼に快い諧調が与えられる」という。¹¹⁾ 闇に浮かび上がる広告照明に、西洋の都会人は日本人の美意識を認めたのである。タウトにとって、都会の華麗な夜景は、日本の生ける伝統であった。

音楽ドキュメンタリー映画『フルトヴェングラーと巨匠たち』の冒頭に、自動車の中から眺めたベルリン市街の夜景が登場する。戦後の五十年代前半に撮影されたものだと思われるが、これを見ると、なるほど田中の回想が納得させられる。ネオンサインは日本人の感覚からすれば地方の小都市のそれに近く、黒々と横たわる石の建築群は、東京や大阪の夜景を見慣れたものにとっては、うらさびしい感じさえする。正宗白鳥は、ベルリンで「商店や飲食店を除いたら、日が暮れてもなか～燈下をつけない」¹²⁾ 習慣を目撃している。節約を徹底する精神がベルリンの町をより暗くしていた。

照明の暗さはベルリン独特の特徴というわけではない。ベルリン・オリンピックを機に渡欧した横光利一はその体験を長編小説『旅愁』に結晶させたが、主人公八代が抱くパリの夜景の第一印象も「暗さ」なのである。

著いたときは夜のためよく見えなく薄暗りのままパリを豫想に脱れた田舎だと思つたのも、夜があけて次の日になつて見ると、ここは大都會と云ふだけではなく、全く聞いたことも見たこともない古古とした數百年も前の佛國のやうなものだつた。¹³⁾

夜と昼の印象がまるで違うところが大都會パリの特徴だというのが、

横光の念頭には東京との比較があったろう。西洋の観客が「大都会」東京の昼間の光景に「古々とした数百年も前の仏閣のようなもの」を期待することは自然である。ファンクが日劇や東京會館などの近代的なビルばかりではなく、ニコライ堂のスナップを挿入したのは、「大都会」の「古々とした」シンボルが欲しかったためであろう。

パリ、ロンドン、ベルリンにおけるナイトライフの変遷を考察した書物の中で、シュレーアは当時のベルリンが決して暗い都会ではなかったと書いている。一九三〇年代に欧州の大都市のナイトライフは変貌を遂げ、「夜への愛」ではなく、「光への憧れ」が新たな快楽を生み出すようになったという。¹⁴⁾ しかし、これはあくまでヨーロッパの基準に従った言葉と解すべきである。

一九〇一年生まれで昭和初年に活躍した作家、龍膽寺雄^{ベエヴメント}の『蹠路スナップ』(昭和五年)は、東京の夜の情景をあざやかに写しとっている。

モダン都市東京の心臓ギンザは、夜と一緒に眼をさます。

真紅・緑・紫。

眼の底へしみつくネオンサイン。

イルミネエションのめまぐるしい点滅はシボレエの広告塔。

パッ！

トロリイに散る蒼いスパアク。

夜間営業の夜の窓々を輝かした百貨店の七層楼。¹⁵⁾

ファンクにとって東京や大阪のネオンサインは驚きだったのではないか。

ドイツ人監督のメッセージは日本よりもむしろヨーロッパの観客を意識したものである。暗夜を追い払う光の洪水は大都会の象徴として申し分のないものである。しかし大阪のネオンサインは歓楽街のものだから、日本人の自尊心を刺激する。おまけにBGMとして使われているのが『東京音頭』ときは、なおさらである。少なくとも『新しき土』の主要観客層である旧制中学卒業以上の学歴人種にとっては、思わず眉をひそめ

たくなるところだろう。もっとも『東京音頭』は、その気になれば、ヨーロッパでも聴くことができた。昭和十一年に渡欧した高濱虚子は、港町アントワープでベルギー人が経営する日本人船員相手のカフェーに立ち寄り、そこで『東京音頭』のレコードがかけられていることを目撃している。¹⁶⁾

日本の観衆が歓楽街のネオンサインから享楽をイメージし、ともすれば恥の意識に囚われるのに対して、ドイツの観衆はそこから違ったメッセージを受け取る。例えば一九三七年五月二十四日の「マゲデブルク新聞」は「ネオンサイン」を高層ビル、鉄道、ホテルと並ぶ、「近代日本」を象徴する現象として捉えている。¹⁷⁾ また「ドゥイスブルガー・ゲネラル・アンツァイガー」紙は「東京の高層ビルのなめらかなファサードにかかるネオンサインの目もあやな光」のまたたきを特筆している。¹⁸⁾ さらに「アンハルター・アンツァイガー」紙は、映画に描かれた東京を近代日本の代表とみなし、「欧州のベルリン、チューリッヒ、それどころかパリと比べても遜色がない」¹⁹⁾ と太鼓判を押す。ネオンサインに象徴される夜の歓楽は近代的な大都市になくてはならない要素なのである。映画の主人公輝雄が徘徊する小料理屋やカフェーは、東京が人口の面だけでなく、文化の面でも大都会であることを示しているのである。

当時の東京には、西欧のナイトクラブのような女性同伴で公然と遊べる場所は存在しなかった。昭和十年に来日した英国人ジャーナリストのヘッセル・ティルトマンはそれを嘆き、健康的な夜の社交場の建設を日本人に進言しているが、そのような施設が公序良俗に抵触するという公安当局の判断は、ヨーロッパとは異なる日本の伝統的な遊びの価値観を浮かび上がらせるだろう。²⁰⁾ 輝雄がドイツ人観客に紹介する夜のスポットにゲルダの姿はない。彼らが日本の近代を強く意識する夜の都会風景にも、日本の伝統が絡み合っている。

夜の東京・夜の伯林

朝鮮、満州に三中井デパートを展開していた中江勝治郎（一八七二—

一九四四）が米国に調査旅行に出かけたのは大正十三年（一九二四年）の事である。大都会ニューヨークのホテルは設備が完備していて感心させられたが、ひとつだけ中江を悩ませたものがある。騒音である。ベッドに寝ていると、真夜中でも自動車の騒音が遠慮なく部屋に浸入してくるのである。「夜も昼も轟くひびき諸車のはげしき音や寝ても寝られず」という言葉が日記に見える。²¹⁾ 中江は睡眠不足に陥った。米国ではすでに四、五人にひとりが自動車を所有し、舗装道路が張り巡らされていた。自動車社会が実現していたのである。

昭和十二年にベルリン工科大学に留学した東京帝大工学部助教授山口青邨は、下宿前の通りで「夜半自動車の音など聞えるのは眠りを妨げる」と日記にしている。²²⁾ 当時の日本人にとって、深夜にも止むことのない大都会の喧騒はまだ現実のものではなかった。

もっとも、「喧騒」という感性が当時とはすっかり様変わりしてしまったことには注意しておく必要がある。帝国ホテルに住んでいたロンドンの「デイリー・エクスプレス」紙極東特派員ティルトマンによれば、夕方になると、涼をとりつつ徘徊する市民の「木のゲタが道路をうつ音が響いた」という。²³⁾ しばしば帝国ホテルを利用した正宗白鳥は、この外人本位のホテルが「外の宿に泊ると、周囲が騒々しくて睡眠を妨げられるのに引かへて、このホテルは部屋の中が静かなので、安らかな眠りが得られるし、讀書執筆にも適してゐる」と評している。²⁴⁾ 帝国ホテルは東京のブルヴァールたる日比谷通りに面している。夜十一時を過ぎれば、メトロポリス東京を象徴するこの目抜き通りも自動車の通行が途絶えた。「周囲」の騒音とはホテルの外から侵入する音ではなく、館内の人声であろう。

永井荷風に『鐘の声』（昭和十一年）という随筆がある。麻布の自邸にともすると聞こえてくるゆりかご揺籃の歌のような鐘の音に、懐旧の情を催すという内容の随筆だが、「車の響、風の音、人の声、ラヂオ、飛行機、蓄音器」²⁵⁾ など、近来ふえてきた雑音が、芝山内からのものとみられる鐘の音を遮ってしまう。当時の「喧騒」は風の音と同レベルの、穏やか

な騒音だった。ちなみに東京を走る自動車の数は、ベルリンのわずか六分の一の五万台に過ぎなかった。白鳥の指摘する周囲の騒々しさも、自動車のものではないだろう。

現在に比べれば、東京の夜がひけるのは早かった。『^{ベエヴメント}蹠路スナッフ』から、さらに引用しよう。

夜の十一時。

表銀座の店々は^{おおど}大扉をおろして、夜店の列はあわただしく屋台を片付け、灯りの白けた^{ベエヴメントおびただ}蹠路、夥しくそこらに散り敷いて居る広告のチラシ、二人三人とかたまつてヨロヨロ泳いで行くのは、バアやカフェから時刻で閉め出された酔ッ払い客。²⁶⁾

十一時は法令で定められた閉店時間であった。ティルトマンは、東京屈指の社交場である帝国ホテルのロビーでさえ、夜十一時を過ぎると人影は途絶えたと言っている。²⁷⁾

もっともクリスマスは例外だったらしい。舟橋聖一が「近代生活」昭和五年十二月号に発表した短編小説『Xマスと危険信号』では、主人公は妻と十二月二十五日の夜に帝国ホテルで明け方まで踊ることにしている。

鈴木政輝は深夜の風俗小景ともいうべきものをスケッチしているが、これは売文の題材になるくらい珍しい例外と考えたほうがよさそうだ。ちなみにルビにふられたドイツ語には、山田耕伴のベルリン印象記に通じるモダニズムの匂いがある。

貸ボオトで深夜の一時頃、ジャズレコオドを鳴らして浜町公園の水の上を、遊んでいる人は誰だろう、わずかに紅灯が、ゆらぐばかりで顔は夜霧に、吞まれて見えない、交番の巡査も^{しゆつんで}黙許する、時間、^{れえげる}規則を睥睨したこの趣味の、^{げしゆまつく}傍若無人、超越的な無目的的なスピードは、昔に変わらず、^な猶おスピード狂時代の今日も絶好の慰安反省の

オアシスだろう。²⁸⁾

小津安二郎監督の映画『淑女は何を忘れたか』（昭和十二年）には、大学のドクトルである主人公の若い姪が主人公に料亭へ連れて行ってもらい、夜中の一時過ぎに帰宅するシーンがある。主人公の妻である叔母は姪の放埒を激しく叱責する。当時の時間感覚からすれば、大きな効果を狙った演出である。「近代生活」昭和四年八月号に発表された『省線リレー風景』の中で、浅原六朗（一八九五—一九七七）は午前一時の新宿駅プラットフォームの情景をスケッチしている。十二時を過ぎると、安月給取りの酔漢に混じってカフェーの女給が中野吉祥寺方面行きに乗ってくる。無論、良家の子女はひとりもない。²⁹⁾

深夜の東京ともなれば、たまにタクシーが通るくらいで、ほかに人影はない。深夜の散歩などといえば、当時は不審の眼で見られたが、それを自ら趣味にしていた海野十三の名作『深夜の市長』が「新青年」に連載されたのは、昭和十一年二月から六月にかけてのことである。主人公は夜中の十二時を回った頃、ひそかに胸を躍らせて街にでてゆく。一台の円タクをひろい、業平橋を超えたところで散歩を始める。

僕は橋畔から離れて、こんどは広い大通りを柳橋の方へブラブラと歩みはじめた。^{は ぼ}幅員が三十三メートルもあるその大通りのまん真中を、^{ステツキ}洋杖をふりふり悠然と^{かつ ぽ}闊歩してゆくのだった。こんな気持のよいことはなかった。大通りは頑固に舗装され、銀色に光る四条のレールが象眼されていた。頭の上をみると手の届きそうなところに架空線がブラブラしているし、大通りの両側のポールにはまるで大宮殿の廊下のように同じ形の電灯が同じ間隔をもって、ずっと向うの方まで点いて居り、それでいてあの大きな^{ずうたい}図体をもった市街電車もいなければ、バスもない。ときどき円タクのヘッドライトがピカリと向うの辻に閃くばかりで、こっちの方まではやってこない。この広い大道を闊歩してゆくのは、ただ自分ひとりだった。なんと

いう勿体ない通り路であろうか。なんという豪快な散歩であろうか。
跟^{よろ}めいて歩こうが、眼をつぶって歩こうが、それとも後向きに歩
こうが、誰も何ともいうものがなく、号笛を鳴らして神経をやたらに
刺激するものもないのである。これが昼間、足の踏み入れようと
ないほど、喧騒を極めたあの柳島の通りであろうか。交通標示器を
ちょっと見誤ればたちまち自動車の車輪をわが血でもって染めなけ
ればならないあの昼間のT市と同じ市街なのであろうか。否々、こ
れは全く別の座標の上に立っている別の市街なのだ。³⁰⁾

ここには映画に描かれた、暗夜を侵食する華麗なネオンサインの趣は
ない。むしろ昼夜のコントラストが強調されている。昼の東京は近代日
本の躍動の中心であるが、主人公はそれに押しつぶされそうな息苦しさ
を覚えている。深夜の東京は昼間に抑圧された精神の開放空間なのであ
る。昼間の息苦しきの源には、夏目漱石以来指摘されている性急な近代
化の病弊があるだろう。さらに都市機能の貧しさも暗示されている。大
勢の人や多量の自動車を整然と通行させるインフラが東京には欠如して
いた。

実は理想郷としての夜のイメージはベルリンについても語られたこと
があった。深夜の散策者は伯林にもいたのである。

月光がベルリンの長く幅広い何本もの通りの眺めや、背の高い家々
の多様な形や、主要な大広場の眺望を美しく見せている。私は嬉々
として、私の夜の散策を始める。そして私の脈拍は、この快適な暗
闇の中で、一層ゆったりと打つようになる。私はこの暗闇の中に、
昼間の灼熱する興奮や殺人的な埃や猛烈な騒音の、気持ちのよい代
償を見出すのである。³¹⁾

ヨーゼフ・アロイス・メルシーが海野の百年以上前に書いたこの文章は、
町を照らす光源を「月光」から「電灯」に替えれば、海野十三のものといっ

でもおかしくない。シュレーアによれば、夜を剣呑な昼間に対立する快適な空間と捉える見方は、ヨーロッパでは一八四〇年代以降、時代遅れなものになってゆく。昼間の単なる陰画ではない、眠らぬ夜の新しいイメージが形づくられてゆくのである。深夜の相貌に限れば、一九三〇年代の東京は、むしろ百年前のベルリンに近かった。

東京に比べると、ベルリンの夜ははるかに長かった。ベルリンの夜は午後十時に始まる。若い女が一人で歩いていても、それ以前ならからかわれることもないが、それ以降は「化性の者の世界」になるから、堅気の女子は必ず男子の随伴を必要とした。³²⁾ もっとも名の通った店なら、危険はなかった。昭和七年にベルリンのカフェで鶴見祐輔は河合榮治郎と深夜二時三時まで談話を楽しんでいるが、このようなことは東京では考えられないと感想を漏らしている。³³⁾ ベルリンの閉店時間は午前三時だった。

いま午前三時である。すばらしく澄みわたった早春の夜。警察の定める閉店時刻だ。何百という飲み屋からほとんど同時に決してしらふとは言いがたい客たちが通りへ吐き出されて来る。すると、今度は暗闇の中が活気づく。売春婦たちの大群が、もうひとり『客』を見つめるべく最後のチャンスを捉えようとする。二、三マルクを稼ぐためのことだ。せかせかと慌ただしく、何十人もの女が街角から街角へと飛ぶように急いでいく。³⁴⁾

深夜になっても、大通りには自動車が日本では想像もできない猛スピードで疾駆し、小路には最後の獲物を狙う女たちがひしめいている。午前三時を過ぎても眠らぬ都市ベルリンは、『深夜の市長』の主人公が散歩を楽しめる空間ではない。山口青邨は、夕方明るいうちから、普通の場所でも声をかけてくる街娼に閉口している。³⁵⁾ ヴァイマル共和国末期の一九二九年（昭和四年）にベルリン大使館へ着任した外交官加瀬俊一は、路面電車の「横っ腹にイルミネーションで」書かれた「^{フロムスアクト}神聖なる行為」

なる広告の意味を下宿の未亡人に尋ねたエピソードを、回想記の中で披露している。「そんな事聞いちゃいけません」と未亡人は赤くなって答えた。コンドームの広告だったのである。³⁶⁾ ベルリンでは夜の生活と昼の生活の境界は消失していた。

一九二二年に村山知義はベルリンで『座せる淫売婦』という油絵を製作している。売春の社会的背景をなす貧困は、第一次世界大戦の敗戦を経験しているだけに、東京よりベルリンの方が一段と深刻だった。ナチス政権が成立する直前、サラリーマンは半数近くが失業し、一家四人がひとつのベッドで寝るといような暮らしも珍しくなかった。ドイツの国力は数年でオリンピックが開けるほどに回復したが、庶民の生活にはまだまだ暗い影がさしていた。

山口青邨は昭和十三年（一九三八年）の三月にイタリアのジェノアで映画『ヨシハラ』の広告を眼にし、「日本に居る時、あれは国辱ものだと聞いてゐたので、もう九時だつたが、入つて見」た。³⁷⁾ すでに述べたごとく、この映画は日本社会の暗部を描いているという理由で日本人の憤激を買ったが、ベルリンにはこの映画に共感を覚える人々がたくさん存在していた。

歓楽の都

レマルクの『西部戦線異状なし』の訳者である秦豊吉は、ナチス政権発足直後の昭和八年（一九三三年）にベルリンを再訪した折に、次のような光景を目撃している。

タウエンチン通りから暗い横町へ曲ると、出逢ひがしらに、背の低い、にやにやした日本人にぶつかる。相變らず傍に獨逸の女を連れて歩いてゐる。これはやはり七年前と同じ伯林だ。

僕は一寸ぞつとする。³⁸⁾

日本にはほとんど知られていないが、第二次世界大戦直後、ベルリン

には日独混血の私生児がかなりいたらしい。³⁹⁾ 昭和十二年に山口青邨は、ベルリン・オリンピックの日本人関係者が下宿した先のドイツ人女性が日本人の混血の双子を産んだという話をレストランで耳にしている。女性の夫はもちろんドイツ人で、産まれるまでは喜んでいたが、子供を見てびっくりした次第であるという。⁴⁰⁾

山口と同じ時期にベルリンに留学していた邦正美はこれとは対照的な体験を伝えている。

ある日友人の誕生日のパーティに招かれて出かけていった。二十数人の若い男女がいた。パンチやビールを飲み、歌ったり踊ったりのにぎやかな雰囲気だった。そのなかで一人の金髪の娘が「お祝いのしるし」だといって、居並ぶ一人一人に順番にキスをしてまわった。やんやの拍手である。ところが僕のところにまわってくると、にこっと微笑んで「ラッセンシャンデだからやめにしよう」とパスしていった。皆はまた拍手してどっと笑った。半分は冗談にも聞こえたが、しかしキスをしなかったのであるから、本気でもあったわけだ。⁴¹⁾

もしこのエピソードが当時の日本の新聞に発表されたら、世論は必ずや沸騰したはずである。ナチスの人種思想が日独提携の障害にならなかったのは不思議としかいいようがない。民族の血統を汚すという意味の「ラッセンシャンデ」(Rassenschande)が、ナチスの人種思想に基づくことは明らかだが、当時すでにそれは異人種間婚姻の法的禁止と言う具体的な拘束力を獲得していた。娘が邦にキスしなかったのは、法律を守ることを誇るドイツ人特有の違法意識をたてにとったブラックジョークであった。パーティーに集まった人々の哄笑は、ヴァイマル共和国の自由な時代を前提にしなければ理解できないであろう。

ウォルター・ラカーによれば、第一次大戦が終わってから、ベルリンは「ヨーロッパの娯楽の首都」になったという。⁴²⁾ もっとも「世界に名

高い伯林の^{ナハトレーベン}夜間生活」の消息は第一次大戦以前から日本にも伝えられていた。片山孤村の『都會文明乃畫圖伯林』は「夜の伯林」に一章を割いているのである。夜間のカフェーでは、客待ちをする化性の女たちがたむろする一方で、芝居のはねた後に立ち寄った堅気の家族同伴の客が席を占めている。片山はこの「中立的雑居」を「一様の奇観」と評している。⁴³⁾

娼婦の数はヨーロッパの他の都市と比べてことさらに多いわけではなかったが、性を通俗的娯楽の対象として追求する、その飽くなき熱意において、ベルリンは天下に名を轟かしていた。ポルノ小説にヌードショー、同性愛クラブ、はては性科学研究所なるもの迄登場し、その影響は映画・演劇にも及んでいた。ノレンドルフ広場にある「獨逸日本人倶楽部」の借りている部屋は、もととはといえば、ベルリンで七十を数えた美少年クラブのひとつであった。

秦豊吉は昭和三年（一九二八年）に文藝春秋社から『好色獨逸女』を刊行し、ベルリンの性風俗を日本に詳しく紹介している。その中から女の拳闘試合のくだりを引用しよう。フリードリッヒ・シュトラッセの端近くに、「フリードリヒシュタット・パラスト」というダンス・ホールがあった。

ここで客の踊りの合間に、獨逸各聯邦より選出せられたりと稱する二十一二の娘さんを、肉色の薄い運動着一枚にして、ボクシングをさせたものである。さすがにノックアウト丈はさせなかつたが、娘さん達は赤い髪黒い髪を振り亂して、盛にふくれた乳房でも、圓くなつた腰でも、上氣した頬でも打ち合つたものである。唯残念な事には、この可憐なる拳闘選手には餘り美人の多くなかつた事だ。少し可哀らしい娘さんだと、ちきに打たれて負けてしまふ。勝つと上着を脱いだ審判の男が女の右手を持ち上げて、「シュレジエン選手ヤンコオスキ嬢の勝」とやると、それでもヤンコオスキ嬢は、はあはあ息をつき乍らお辭儀をするのである。

この拳闘の前には、客席から懸賞金を募集すると觸れる。すると

このシユレジェンの材木屋さんあたりが、胸を反して何枚かの紙幣を掴み出す。「唯今この紳士より何百萬馬クの懸賞金が出ました」とどなると、それに釣られて今度は向ふの方からも「バイエルンの選手が勝つたら」なぞといふ条件付のが出てくるのである。⁴⁴⁾

この「女拳闘」はその後警察により禁止されたが、一時ベルリンで人氣を博し、街角の広告塔にも「赤い猿股一枚の廣告」が張り出されていた。

ヴィッテンベルク広場近くに、ベルリンの日本人社会御用達のカフェーがあった。その名を「ゲイシャ」という。大使館で在住手続きを済ませると、なぜか早速ここからダイレクトメールが舞い込む仕掛けになっていた。でぶでぶに太った年老いた「醜い女将」が、しきりに「オハヨーオハヨー」と愛嬌をふりまく。そして長身のドイツ人ボーイが「オハヨー」と名づけたカクテルを急ぎ足で運んでいく。⁴⁵⁾ ヴァイマル共和国の首都ベルリンにはカフェー文化の花が咲いたが、その変り種といえよう。「カフェー・ビクトリア・ルイーゼ」は「ゲイシャ」と異なり、ニッポンを売り物にした店ではない。しかし入り口に近い席こそドイツ人の姿もあったが、奥へ進むと日本人ばかりになる。そして「日本人向きに上品に、あどけなさそうに作った若い女たち」がそばに侍っていた。⁴⁶⁾

昭和十二年頃のベルリンのカフェーでは、日本人は顧客の地位を確立していた。「ビクトリア」、「メルテンス」、「アルテリーベ」などでは、女たちは一言二言、日本語がしゃべれた。⁴⁷⁾

昭和十二年に日本郵船支店長としてベルリンに赴任した有吉義弥は、日本人の接待に「キャバレーと待ち合いの合いの子みたいな」「カカド」、「フェミーナ」などをよく利用した。「陸海軍が臨軍費で湯水のように接待している時分だったので、日本人は最高のお客だったし、」従ってカフェーの女性たちは「日本人によく慣れていた」という。⁴⁸⁾

歓楽街として聞こえたタウエンツィーン通り的高级キャバレー「リオリタ」では、女性へのチップが十マルク、ボーイや地下荷物預かりの女性のそれは三―五マルクが相場だった。しかし日本人だけは一般に二倍

の金額が必要で、大使館の高官クラスになると五十マルクに跳ね上がったという。⁴⁹⁾ 高官が図抜けて高額なのは恐らく機密保持のためであろうが、日本人のチップが割高なのは金遣いの荒い軍人のせいかもしれない。ベルリン在住の日本人が概して裕福なのは、東京在住のドイツ人と同様である。日本の旧制高校に赴任する、大学出たてのドイツ人は、日本で高級官僚並みの高給をもらえたが、生活費はそれに輪を掛けて高いと聞かされていた。豊かな外国人が割高な出費を強いられる構図は日独で変わりがない。

当時の軍部の金銭感覚について、正宗白鳥の証言を引用しよう。正宗は満鉄・シベリア鉄道経由で欧州へ向かう折、乗り合わせた若い将校について「濃厚な印象」をもった。

Kは三十未滿の細つこい弱さうな將校であつたが、飛行機研究のためロンドンへ行くのだと云つてゐた。ハルビンでは、軍用自動車で市中見物をする時、私達夫妻を誘つた。二三年のロンドン滞在費として参萬圓は支給されてゐるが、必要に應じて、いくらでも増額されることになつてゐると云つてゐた。その頃（昭和十一年）の三萬圓は大層な金高なので、かういふ凡庸らしい青年も、軍人たるがために、そんな旅費が貰へるのかと、私は日本の時勢を感じたのであつた。あとでフィンランドへ行つた時、植物研究に來たといふ或大學教授に會つたが、その教授が學校から與へられた旅費は、たゞの八百圓であると聞かされて、Kの旅費と比較して感慨に耽つたのであつた。

「ロンドンで家庭戀ひしくなつたら、家内をハルビンあたりまで呼んで會ひに來ますよ」と云つてゐたが、馬關で獨りで藝者遊びして日本に別れを告げたことを、汽車の廊下での雑談會で得意然として話してゐた。⁵⁰⁾

当時の三万円は、今の九千万円ぐらいだろう。在外武官の羽振りのよ

さは推して知るべしだが、在ベルリンの武官はドイツ製の工作機械を大量に買いつけていたので、その権勢はこれに並ぶものがなかったといつてよい。日独貿易は日本の極端な入超で、同年の日本からドイツへの輸出額が三千五百五万四千円にとどまるのに対し、ドイツから日本への輸入は一億千五百四十九万九千円と輸出の三倍に達していた。⁵¹⁾ ちなみに昭和十一年度の軍事費は前年比五千億円増の十億五千万円、総予算の四割を超えていた。むろんこれほど軍事費を使う国は欧米にひとつもなかった。

映画には主人公輝雄が女給と相席で酒を飲むシーンがあるが、山本夏彦の回想によれば、東京の「カフェー」の全盛時代は昭和五、六年に終わって、酒中心のバーの時代になったという。カフェーの売り物のエロスは女給が同席する「新興喫茶」で復活する。これが昭和十三、四年で、女給が立ったままで客席に座らない「純喫茶」から派生してきたものらしい。⁵²⁾ 映画が製作された昭和十一年はちょうど端境期にあたっている。西洋人の女がひとりでバーの止まり木に座っているシーンがあるが、現実的ではない。これはドイツ人向けの演出である。在日ドイツ人は自前のクラブを東京や横浜に構えていた。統計によれば、東京旧市部には昭和八年に千七百一軒を数えたカフェーは、昭和十一年に千三百三十軒に減っている。⁵³⁾

鶴見祐輔は昭和七年（一九三二年）に河合榮治郎とともに訪れたカフェー「フェミーナ」の様子を詳述している。

酒も飲まず、ダンスも出来ない二人が、形勝のテーブルを取つて、不粹なビーフステーキを頬張つてゐると、この國の習慣として、カフェーの踊子から、卓上電話が盛んに掛つてきた。あなたのテーブルへ呼んでくれ、といふのである。

それは獨逸のみに見られる面白い仕掛である。中央が廣いダンス場になつてゐて、その周圍に澤山のテーブルを置いて食事し、二階のバルコニーにもテーブルがある。そのテーブルには皆番號札が立つてゐて、電話機が置いてある。方々のテーブルにこの店の踊子の

女たちが坐つてゐて、勝手に客に電話を掛けて来るのだ。こんな自由なやり方は獨逸以外では私は見たことはない。獨逸では知らない婦人のところへ往つて、踊りを申し込んでもいいのださうだ。のみならず女の方から男に踊を申し込んで来るのだ。

電話が鳴る度に私は受話機を取り上げて、佛蘭西語で断つた。獨逸語で先方に滔々とやられては敵はないと思つたからである。それを見てゐた河合君が、

『面白いですなあ。』

と謂つたのが私には面白かつた。⁵⁴⁾

ニュルンベルク街五十番地、タウエンチーン^{エック}街角にあったこの店は全テーブルに電話を備えることでベルリンっ子の話題をさらった。ナチス政権成立後も賑わいは衰えなかった。山口青邨は友人五人と連れ立って昭和十二年の大晦日をここで過ごしている。入場券は十マルク、現在の価格にして三万五千円ほどだろうか。食事はなかなか豪華で、スッポン・スープ、シュヴァルツヴァルトの岩魚、アスパラの芽と馬鈴薯のサラダなどが出された。ドイツの婦人たちは胸元のあいた長い裾たけの夜会服をまとっていた。

東京のカフェで輝雄が酒を飲むシーンで興味深いのはジャズ・バンドである。ドイツでは一九二〇年代からアメリカ文化の流入が進み、ベルリンでも米人が出演するジャズバーが増加していた。米国の少女歌劇がレビュー劇場で公演し、大反響を巻き起こしたこともあった。しかしヒトラーはジャズに退廃音楽の烙印を押し、演奏は禁止されていた。

当時の東京には、英語が話せる芸者がひとりだけいた。「キハル」という。欧米からやってくる名士にひっぱりだこだったが、ファンクの座敷にも呼ばれている。ヨーハン・シュトラウスのワルツが好きだった。キハルの記憶によれば、ファンクはドイツ訛りの強い英語を話したという。実はキハルにはその後『新しき土』への出演依頼があった。芸者置屋の組合長の反対にあい、出演は叶わなかったが、もし実現していれば、ド

イッ人にとって映画の魅力は倍加したことだろう。

享楽と統制

ベルリン・オリンピックが開催された一九三六年（昭和十一年）は、ドイツにとって両大戦間でもっとも豊かな年であった。物乞いが街頭から姿を消し、エルベ河からは大戦の傷跡も生々しい廃船が撤去された。⁵⁵⁾

娼婦は親衛隊保安警察によって強制収容所送致候補者リストに挙げられていたが、ドイツ政府が体面上気にかけていたのはむしろ物乞いだった。物乞いをしているところが見つかる、容赦なく警察に連行された。⁵⁶⁾ 年末には貧民救済の募金キャンペーンが大々的に展開されていた。募金集めのための商品は年により異なった。一九三七年には五種類の豆本が販売された。山口青邨はそこから『総統』という、縦五センチ、横三センチの本を買い求めた。価格は二十プフェニヒ。ヒトラーが労働者たちと交歓する写真が二十五葉収められている。ひもがついており、ボタン・ホールに引っ掛けてぶら下げられるようになっている。そのようにすれば、街頭を歩くとき、販売員の執拗な売り込みを避けることができた。⁵⁷⁾ もっともベルリンの日本人社会では、ウンター・デン・リンデンの裏通りに出沒する物乞いが話題になっている。人を見てボロボロ涙をこぼし、金をせびるのである。⁵⁸⁾

ナチス政権は享楽の分野でも統制を強めたが、過去の価値観と手を切ることはできなかった。一九三八年の「ドイツ芸術の日」には、「アフロディテの誕生」という盛大なヌードショーが開催されている。親衛隊は高級将校向けの娼家を自ら経営し、盗聴マイクで収集した情報を反対派の追いつめしにに使っていた。ドイツでは最も恐ろしい敵は味方にいた。

一九三五年、刑事警察に逮捕された恐喝の常習犯オットー・シュミットの供述から、男色の秘密をもっている高官名が明らかになった。その中の一番の大物は陸軍総司令官フォン・フリッツ上級大将であった。この情報はゲシュタポの「国家同性愛取締本部」担当ヨーゼフ・マイジン

ガーから SS 国家指導者ハインリヒ・ヒムラーを経由してヒトラーに報告された。マイジンガーは同性愛者と堕胎医の摘発が専門だったが、一方で彼らをたくみに党務に起用して名をあげていた。親衛隊の強敵である国防軍の弱体化は必至の形勢だったが、意外にも総統はフォン・フリッチュに関する忌まわしい文書の焼却を命じた。国防力強化を急ぐヒトラーはここで軍を代表する側近たるフリッチュを失うわけにはいかなかったのである。

一九三八年、全体主義国家の権力機構を揺るがすスキャンダルが発生する。一月十二日、国防大臣ヴェルナー・フォン・ブロンベルク元帥は、アドルフ・ヒトラーとヘルマン・ゲーリングの立会いのもと、内輪の結婚式を挙げた。花嫁のエレーナは速記タイピストだったが、ゲシュタポは式の参加者とは異なる見解をもっていた。風紀犯罪係の保管していた男女の全裸猥褻写真にエレーナが写っていたからである。ブロンベルクの醜聞はヒトラーに深刻な影響を与えた。もはやヒトラーは栄えある国防軍高官の肩書きなどは信用しなくなったのである。いったん闇に葬られたフリッチュの事件も蒸し返されることになった。二月四日、ヒトラーは国防省を解体改組し、国防軍総司令部（OKW）を発足させた。十六人の将軍が強制退職となり、四十四人が転任させられた。

三月十日、フリッチュに対する公判が開かれた。判決は三月十八日に下された。結果は無罪。オットー・シュミットがゆすっていた相手は、上級大将と同名ではあるが別人の退役騎兵大尉だったのである。裁判長ゲーリングは、事件をでっちあげる時点ではゲシュタポに味方したが、裁判ではシュミットを徹底して追い詰めた。国防軍の政治的無力化という目的を達した以上、ゲシュタポならびにその上部組織である親衛隊にさらなる権力伸張の口実を与えることは危険だったからである。

ヒトラーは前陸軍総司令官の復権を認めたが、第十二砲兵連隊長の閑職に追いやった。フリッチュは一九三九年九月、自ら「標的」と名づけたこの連隊を率いてポーランド電撃戦に参加し、ワルシャワ近郊で戦死した。シュミットはヒムラーの命令で射殺された。

調書を作成したマイジンガーは一九三九年、ドイツ領となったポーランドへ保安警察司令官として着任し、そこで残虐な蛮行に熱中する。その後マイジンガーは日本との関わりを持つようになる。一九四一年（昭和十六年）五月に、ドイツ大使館付警察連絡官として東京に赴任するのである。この地位は日独防共協定によって新設されたものであったが、形式上は外交官名簿にも記載されず、実質のある職ではない。恐らく目前に迫った対ソ「バルバロッサ」作戦に関係した任務を帯びてやって来たものと思われる。マイジンガーは戦争終結まで東京にとどまった。その後ポーランドに引き渡され、一九四七年三月、絞首刑に処されている。⁵⁹⁾

松の家とラインゴールド

同盟通信ベルリン支局の江尻進によると、朝日新聞の笠信太郎はベルリンのさるレストランで、日本風のとんかつを強引に作らせて悦にいていたというから⁶⁰⁾、日本人のお国料理への執着は根深いものがあるかもしれない。当時、ベルリンにはすでに料理こそ粗末ではあるが、れっきとした日本料理屋があった。ベルリン在住の日本人は四百人を数えたから、かなりの利用が見込めたのである。ベルリンに六週間滞在した正宗白鳥も、このガイスベルク街の日本料理屋で晚餐をとることにしていた。

勝本清一郎（一八九九—一九六七）は昭和六年に新潮社から出した『赤色戦線を行く』の中で、この料理屋の詳しい紹介をしている。軒先には日章旗が掲げられ、「江戸御料理松の家」というペンキ塗りの看板がかかっていた。

室内には、冬でも天井に岐阜提灯をつるし、壁には三色版の日本美人のポスターをかかげ、又、定食一マーク六〇ペニヒ、チャプスイーマーク五〇ペニヒ、豚なべ二マーク、カツレツ一マーク五〇ペニヒ、等々の内地でいえば氷屋向きの張札——これを称してベルリ

ンの江戸御料理という。女中も若いドイツ美人だから「ビッテ・フロライン・アイン・つけもーの！」といった調子に注文しなければならぬ。

「久しぶりの日本料理にいいよありつける訳ですね。オサシミ、エビの天プラ、スの物……なんでもあるのは有難いな。」

「今に見ていたまえ、黒塗りの箸まで持ってくるから——。しかしとにかく、愛国的行為だと思って、ありがたく食うこと——でないと、まずくて食えませんよ。」

金髪の若い女中は、日本人なれのしたコツで、日本人ドクター同士の戯談口を、笑顔のまま、忍耐づよく拝聴している。⁶¹⁾

「松の家」は在ベルリンの日本人および日本からの旅行客の社交場であるが、それ以上のものではない。異国に孤立する日本文化の離れ小島なのである。極東のなじみの薄い国の料理にまでドイツ人の関心は及ばない。もっとも裕福なドイツ人は高級レストラン「ケムピンスキー・ハウス・ファーターラント」内にある日本式喫茶で、ゲイシャが給仕するお茶を楽しむ事ができたのではあるが。

江尻進によれば、ベルリン市内東南地区の「リュツォ広場」、「ノレンドルフ広場」を結ぶ地域にあるビール・スタンドやレストランでは、片言の日本語も聞かれたという。⁶²⁾ この界限には日本人会クラブと附属食堂があり、日本人の往来が絶えなかった。

昭和十一年にベルリンを訪れた高濱虚子は、郊外のヴェルダーに花見に出かけている。持ってきた弁当をあけて箸を使うと、まわりの独逸人は好奇の視線を浴びせた。「向う向いて腰掛けて居る人は振り向き、人陰になつて居る人は延び上りして珍しさうに見るのであつた。」⁶³⁾ 虚子はこのとき一句つくっている。

箸で食ふ花の辯當来て見よや

東京には洋風のカフェやレストランがすでに多数存在した。しかもお国振りを細かく演出していた。ドイツ・レストランでは、第一次世界大戦で青島に従軍した元兵士が経営する高級レストラン「ローマイヤ」があった。銀座にはさらにドイツ人が所有するふたつのドイツ風カフェも営業していた。「フレーダーマウス」はテーブルが四つ、女は二、三人という小さなカフェである。日本を訪れた作家フリードリヒ・ジープルクの回想によれば、

それは陰気くさいほら穴で、インチキの織物を掛けた汚い、すり切れた椅子が置いてあった。その店で日本的なところといえば、一人か二人の下等なウェイトレスだけで、いつも客の隣に坐り、首に抱きついて、気取ってクスクス笑った。日本人はほとんど誰もそこには来なかった。

もうひとつの社交場「ラインゴールド」はずっと大きなバー兼レストランで、ドイツ人や他のヨーロッパ人ばかりでなく、「実業界や政界で何らかの地位のあったコスモポリタンの」日本人も出入りしていた。⁶⁴⁾ウェイトレスは日本人であった。

「ラインゴールド」、この名前はポツダム広場近くにあった高級レストランにちなむのかもしれない。

『ラインゴルト』(Rheingold)の如き廣大無邊の料理店は亦同社(訳者注:アッシーグ・株式会社)の經營するところである。千二百萬を費した贅澤極まる大建築には四千人を容れて餘がある。ニーベルンゲン傳説のワルハラに擬へた柱の廣間、寄木細工の廣間、黒檀の廣間、白瑪瑙の廣間、皇帝の廣間等いづれも數奇を凝らした大廣間である。二階の皇帝カイザーの廣間ザルは千二百人の客を饗するに足り、壁は石膏、天井は金色のモザイク、入口は黒塗の銅板で、フリードリヒ赤髯帝バルバロッサとキルヘルム一世の大銅像が兩側に据へてある。⁶⁵⁾

東京の同名店はその規模にしろ、豪華さにしろ、ベルリンの本家に遠く及ばないが、在日ドイツ人には、その名前の響きは好ましい印象を与えたことだろう。昭和十二年（一九三七年）に日本の検察制度を研究するために来日したりヒャルト・プロイアーは、ときどき「ローマイア」でステーキを食べ、「ラインゴールド」にも出かけたという。⁶⁶⁾ 奨学金が月百五十円（現在の価値で約四十五万円）も支給されるので、学生でも外食は容易だった。最も有名な常連は言うまでもなくリヒャルト・ゾルゲである。日本在住のドイツ人は約三千人。この数は在独日本人の六倍近くに当たる。横浜には「フロインドリーブ」、神戸にも「ズッペントップフ」というドイツ・レストランがあった。居住者の数に応じて、ドイツの日本食レストランよりも裾野は広がった。軽井沢にはドイツ人の経営するペンションもあった。

つづく

引用・参考文献

- 渡歐案内 日本郵船 1931
日本郵船株式会社五十年史 日本郵船株式會社 1935
東和商事合資会社社史 1942
標準音楽辞典 音楽之友社 1966
小松製作所五十年の歩み 1971
現代史資料 40 マスメディア統制 1 内川芳美解説 みすず書房 1973
資料 日本現代史 9 粟屋憲太郎・小田部雄次編 大月書店 1984
「文藝春秋」にみる昭和史 第一巻 1988
高松宮日記 第二巻 中央公論社 1995
モダン都市文学 全10巻 海野弘・川本三郎・鈴木貞美編 平凡社 1989 - 1991
復刻版 サラリーマン 第20巻 不二出版 2000
復刻版 東洋経済新報 第292巻 昭和期Ⅱ 東洋経済新報社 2002
昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽 秋山邦晴著 林淑姫編集 みすず書房

2003

芥川龍之介全集 岩波書店 1977 - 78

有馬頼寧日記 - 3 昭和十年～昭和十二年 尚友倶楽部・伊藤隆編 山川出版社

2000

回想録・日本海運とともに 有吉義弥著 財団法人日本海事広報協会 1981

ベルリン特電 江尻進著 共同通信社 1995

百万人の世界文学 15 母の肖像・東の風西の風 パール・バック著 村岡花子訳

三笠書房 1955

空間の日本文化 オギュスタン・ベルク著 宮原信訳 ちくま学芸文庫 1994

美を求める闘い ドーリス・ブルヒャルト著 西村正身訳 青土社 2003

ゾルゲ追跡 (上) (下) F. W. ディーキン／G. R. ストーリィ著 河合秀和訳

岩波現代文庫 2003

日本浪漫派とナショナリズム ケヴィン・マイケル・ドーク著 柏書房 1999

キャバレーの文化史 I・II ハインツ・グロイル著 岩淵達治・田辺秀樹・平井正・

保坂一夫訳 ありな書房 1983・1988

日本浪漫派批判序説 橋川文三著 講談社学術文庫 1998

伯林・東京 秦豊吉著 岡倉書房 1933

繁華街の近代 初田亨著 東京大学出版会 2004

武者修行世界をゆく 早川雪洲著 実業之友社 1957

幻の三中井百貨店 林廣茂著 晩聲社 2004

ヒトラー・ユーゲント 平井正著 中公新書 2001

髑髏の結社 SSの歴史 (上) ハインツ・ヘーネ著 講談社学術文庫 2001

ヒトラーのテーブル・トーク 1941 - 1944 (上) ヒュー・トレヴァーニローバー

解説 吉田八岑監訳 三交社 1994

わが闘争 アドルフ・ヒトラー著 平野一郎、将積茂訳 2001

回想のスメドレー 石垣綾子著 社会思想社 現代教養文庫 1987

私の昭和史 昭和が燃えた日 加瀬俊一・加瀬英明著 光言社 1990

都會文明乃畫圖伯林 片山孤村著 博文館 1913

総動員体制と映画 加藤厚子著 新曜社 2003

- 羊の歌 加藤周一著 岩波新書 1968
- 河合榮治郎全集 社会思想社 1967 - 70
- 教養としての思想 河合榮治郎研究会 社会思想社 2002
- 映画ひとすじ 川喜多かしこ著 講談社 1973
- 短篇三十三と半自叙伝 菊池寛著 文藝春秋 1977
- 暗黒日記1 清沢洌著 ちくま学芸文庫 2002
- 江戸・東京の中のドイツ ヨーゼフ・クライナー著 安藤勉訳 講談社学術文庫
2003
- 組織の興亡 日本陸軍の教訓 日下公人・三野正洋著 ワック 2000
- ベルリン戦争 邦正美著 朝日選書 1993
- 貴志康一 よみがえる夭折の天才 日下徳一著 音楽之友社 2001
- ジャポンスコ ボヘミア人旅行家が見た 1893 年の日本 ヨゼフ・コジェンスキー
著 鈴木文彦訳 朝日文庫 2001
- フィルハーモニー雑記 近衛秀麿著 日本書莊 1936
- わが音楽三十年 近衛秀麿著 改造社 1950
- 風雪夜話 近衛秀麿著 講談社 1967
- 古在由重著作集 勁草書房 1967
- 日本レコード文化史 倉田喜弘著 東京書籍 1992
- ワイマル文化を生きた人びと ウォルター・ラカー著 脇圭平・八田恭昌・初宿
正典訳 ミネルヴァ書房 1980
- 昭和生文化年代記1 戦前 三國一朗編集 TOTO 出版 1991
- 戦前戦中を歩む 編集者として 美作太郎著 日本評論社 1985
- 技術開発の昭和史 森谷正規著 朝日文庫 1990
- 演劇的自叙伝1・2 村山知義著 東邦出版社 1970・1971
- 私と満州国 武藤富男著 文藝春秋 1988
- <日本の近代13>官僚の風貌 水谷三公著 中央公論新社 1999
- 昭和時代 中島健蔵著 岩波新書 1957
- 昭和史I 1926 - 1945 中村隆英著 東洋経済新報社 1993
- 中野重治全集 第十一巻 筑摩書房 1979

- 中学生のみた昭和十年代 中野卓編・著 新曜社 1989
- 倒錯の都市ベルリン 1918 - 1945 長澤均+パピエ・コレ著 大陸書房 1986
- 西田幾多郎全集 第十四巻 岩波書店 1979
- ドキュメント昭和4 トーキーは世界をめざす NHK“ドキュメント昭和4”取材班 角川書店 1986
- 江戸っ子芸者一代記 中村喜春著 草思社 1983
- 荷風全集 岩波書店 1992 - 95
- 聖林の王 早川雪洲 野上英之著 社会思想社 1986
- ベルリン 1910 - 1933 芸術と社会 エーバーハルト・ロータース著 多木浩二・持田季未子・梅本洋一訳 岩波書店 1995
- 第二次大戦下 ベルリン最後の日 新関欽哉著 NHK ブックス 1988
- 二十世紀の神話 アルフレート・ローゼンベルク著 1935 吹田順助・上村清延共訳 中央公論社 1938
- 音楽はわが生命 ローゼンストック回想録 ジョセフ・ローゼンストック著 中村洪介訳 日本放送出版協会 1980
- 昭和不良伝-越境する女たち篇 斎藤憐著 岩波書店 1999
- 永遠のマドンナ 原節子のすべて 佐藤忠男監修 出版協同社 1986
- 大都会の夜 パリ、ロンドン、ベルリン—夜の文化史 ヨアヒム・シュレーア著 平田達治・我田広之・近藤直美訳 鳥影社 2003
- 回想の第三帝国 [上] アレクサンダー・シュタールベルク著 鈴木直訳 平凡社 1995
- ゾルゲ事件 獄中手記 リヒャルト・ゾルゲ著 岩波現代文庫 2003
- 渡佛日記 高濱虚子著 改造社 1936
- <日本の近代12> 学歴貴族の栄光と挫折 竹内洋著 中央公論新社 1999
- たべもの世相史・東京 玉川一郎著 毎日新聞社 1976
- 私が歩んだ道——滞欧二十年—— 田中路子著 大空社 1999
- あ・ら・かると 辰野隆著 白水社 1936
- ニッポン ブルーノ・タウト著 森佛郎訳 講談社学術文庫 1991
- 日本報道三十年 ヘッセル・ティルトマン著 加瀬英明訳 新潮社 1965

- トヨタのあゆみ トヨタ自動車工業株式会社 1978
- 中華電影史話 一兵卒の日中映画回想記 1939 - 1945 辻久一著 清水晶校註
凱風社 1987
- 甘粕大尉 角田房子著 中公文庫 1979
- ミチコ・タナカ 角田房子著 中公文庫 1980
- 歐米大陸遊記 鶴見祐輔著 大日本雄辯會講談社 1933
- 戦時下日本のドイツ人たち 上田浩二・荒井訓著 集英社新書 2003
- ヴァイツゼッカー家 マルティン・ヴァイン著 鈴木直・山本尤・鈴木洋子訳
平凡社 1993
- 山田耕伴著作全集 岩波書店 2001
- 伯林留學日記 上 山口青邨著 求龍堂 1982
- 幻のシネマ満映——甘粕正彦と活動屋群像—— 山口猛著 平凡社 1989
- 哀愁の満州映画 山口 猛著 三天書房 2000
- 昭和東京私史 安田 武著 朝文社 1994
- 僕の昭和史 I 安岡章太郎著 講談社 1984
- 定本横光利一全集 河出書房新社 1981 - 82
- Karlheinz Wendtland: Geliebter Kintopp. S P P ämtliche deutsche Spielfilme von
1929-1945 mit zahlreichen Künstlerbiographien Jahrgang 1937 und 1938. 2 .ü
bearbeitete Aufl. Berlin
- Janine Hansen: Arnold Fancks *Die Tochter des Samurai*. Nationalsozialistische Propaganda
und japanische Filmpolitik. Wiesbaden 1997
- Klaus Kreimeier: Die Ufa-Story. Geschichte eines Filmkonzerns. München/Wien
1992.Frankfurt a.M. 2002
- Hans C. Graf von Seherr-Thoss: Die deutsche Automobilindustrie: eine Dokumentation von
1886 bis 1979. 2 . korrigierte u. erw. Aufl. Stuttgart 1979.
- Sibylle M. Sturm, Arthur Wohlgemuth: Hallo? Berlin? Ici Paris! Deutsch-französische
Filmbeziehungen 1918-1939. München 1996.
- Friedrich v. Zglinicki: Die Wiege der Traumfabrik. Von Guckkästen, Zauberscheiben und
Bewegten Bildern bis zur UFA in Berlin. Berlin 1986.

注

- 1) 『都會文明乃畫圖伯林』、1 - 2 ページ。
- 2) 「ヨーロッパを想ふ」、正宗白鳥全集第11巻、141 ページ。
- 3) 横光利一全集第8巻、496 ページ。
- 4) 山田耕筰全集第2巻、287 ページ。
- 5) 『空間の日本文化』。
- 6) 『ベルリン特電』、25 - 26 ページ。
- 7) 『ベルリン戦争』、14 ページ。邦は、旧制松江高校から東京帝国大学文学部美学美術史学科に進んだ。
- 8) 正宗白鳥全集第11巻、「郷愁——伯林の宿」、40 ページ。
- 9) 『日本文化私観』、265 - 268 ページ。
- 10) 『私が歩んだ道』、198 ページ。
- 11) 『ニッポン』、88 ページ。
- 12) 正宗白鳥全集第11巻、「郷愁——伯林の宿」、41 ページ。
- 13) 横光利一全集第8巻、48 ページ。
- 14) 『大都会の夜』、313 ページ。
- 15) 『モダン都市東京案内』、172 ページ。
- 16) 『渡佛日記』、四月十八日の条。
- 17) Magdeburgische Zeitung, Fanck, S.59.
- 18) Duisburger General-Anzeiger, 26.6.1937. Fanck, S.16.
- 19) Anhalter Anzeiger, 22.4.1937. Fanck, S.59.
- 20) もっともドイツでナイトライフが楽しめた都会はベルリンに限られた。フランクフルトには、ナイトクラブは3軒しかなかった。『ワイマル文化を生きた人びと』、281 ページ。
- 21) 『幻の三中井百貨店』、70 ページ。
- 22) 『伯林留學日記』上、昭和十二年四月二十日の条。
- 23) 『日本報道三十年』、19 ページ。
- 24) 『観劇日記』（昭和二年）、正宗白鳥全集第13巻、127 ページ。
- 25) 荷風全集第17巻、348 ページ。

- 26) 『モダン都市東京案内』、184 - 185 ページ。
- 27) 『日本報道三十年』、14 ページ。
- 28) 「大都會スピード狂想曲」（「旅」昭和五年七月号）、『モダン都市文学』V、219 ページ。
- 29) 「深夜の乗客その他」、『モダン都市東京案内』、428 - 433 ページ。
- 30) 海野十三全集第3巻、106 ページ。
- 31) 『大都會の夜』、52 ページ。
- 32) 『都會文明乃畫圖伯林』、165 ページ。
- 33) 『歐米大陸遊記』、413 ページ。
- 34) 『大都會の夜』、247 ページ。
- 35) 『伯林留學日記』上、昭和十二年五月十八日、昭和十三年四月二十五日の条。
- 36) 『昭和が燃えた日』、32 - 32 ページ。
- 37) 『伯林留學日記』上、昭和十三年三月三十日の条。
- 38) 『伯林・東京』、4 ページ。
- 39) 『ミチコ・タナカ』、190 ページ。
- 40) 『伯林留學日記』上、昭和十三年五月十三日の条。
- 41) 『ベルリン戦争』、57 ページ。
- 42) 『ワイマル文化を生きた人びと』、279 ページ。
- 43) 『都會文明乃畫圖伯林』、145 ページ。
- 44) 『好色獨逸女』、295 - 296 ページ。
- 45) 「先ず映画物語風に——新ベルリン風景」、『モダン都市文学』IX、152 - 153 ページ。
- 46) 同上、155 ページ。
- 47) 『伯林留學日記』上、昭和十二年七月十八日の条。
- 48) 『回想録・日本海運とともに』、98 - 99 ページ。
- 49) 『ベルリン特電』、81 ページ。
- 50) 「ソ聯十日」、正宗白鳥全集第11巻、203 ページ。
- 51) 朝日新聞昭和十六年四月十九日朝刊。
- 52) 山本夏彦、「『戦前』という時代」、昭和生文化年代記1、19 ページ。

- 53) 『繁華街の近代』、179 ページ。
- 54) 『歐米大陸遊記』、411 - 412 ページ。
- 55) 『回想の第三帝国』[上]、168 ページ。
- 56) 『回想の第三帝国』[上]、168 ページ。
- 57) 『伯林留學日記』上、昭和十二年十月十六日の条。
- 58) 『伯林留學日記』上、昭和十二年四月二十二日の条。
- 59) 『SS の歴史』上、第十章「RSHA ——帝国公安本部」。『ゾルゲ追跡』(下)、第17章「マイジンガー大佐の報復」。
- 60) 『ベルリン特電』、151 ページ。
- 61) 「先ず映画物語風に——新ベルリン風景」、『モダン都市文学』IX、151 - 152 ページ。
- 62) 『ベルリン特電』、41 ページ。
- 63) 『渡佛日記』、228 ページ。
- 64) 『ゾルゲ追跡』(上)、246 - 248 ページ。
- 65) 『都會文明乃畫圖伯林』、142 - 143 ページ。
- 66) 『戦時下日本のドイツ人たち』、90 ページ。